亞美理駕大合衆國京在華盛頓西國記年之一千
八百五十二年十一月十三日即壬子年十月
初六日封

大學士依斐烈奉勅書

御硃華

國璽

山家和歌集 上

□□蔵書
九曜文庫

春

立春乃朝よみける

年くれぬ春くへしとはおもひねにまさしくみえてかなふはつゆめ

山のはのかすむけしきにしるきかなけさよりやさは春のあけほの

春たつとおもひもあへぬあさとてにいつしかかすむおとは山かな

なにとなく春になりぬときく日より心にかゝるみよしのゝ山

とけそむるはつ若水のけしきにて春たつことのくまれぬるかな

家々に春を翫ふといふ事を

門ことにたつる小松にかされてやとてふやとに春はきにけり

元日子日にて侍りけるに

子日しにかすみたなひくのへに出てはつうくひすのこゑをきゝつる

山さとに春たつといふことを

山さとはかすみわたれるけしきにて空にや春のたつをしるらん

難波わたりに年こしに侍りけるに春たつ心をよみける

いつしかも春きにけりと津の国の難波の浦をかすみこめけれ

春になりける方たかへにしかのさとへまかりける人にくして

まかりけるにあふさか山のかすみたりけるを

見て

わきてけふあふさか山のかすめるはたちおくれたる春やこゆらん

ころにこえて祝部

ふる山に春とはかりはかすめともみてしけんにあさき雪の下水

題しらす

春しれと谷の下水もりそくる岩まの氷ひま絶えにけれ

冬すきは何とか君をはなれさむ雪消ぬみ山
海道の霞にいそかしさ
りうやくうしはするかはらのそ綾あやまより落葉をまとひて
あれしに残雪をよみていはれて
残ことよみさみの松はみしつい梢にこゝろ霞はかわ

子日

君ことよのはしめの松ひくは人のいのちも千世まても
みよ日すかくへよ霞はしさしいそて小松かけ千代もをさむ
みな日しよ霞はさすひくのつよあそて初音のなくとさらしき
わかみよ初子のわひしられくのむしくは
けふもしるし
けふみつかひそさるよ初子はわひぬれ折やくはしのひぬ

雪中若菜

けふみしみすかよりして降りぬる宮人のしのふ袖に見ゆらむ

若菜

春日野八年の内にに雪つみて春は若菜の生ふるなりけり

雨中若菜

春雨にふるのの若菜生ぬらしぬれてつまんかたみたぬきれ
若菜よりおもてにそらを袖にをかよひかも
わかなつむのへのあそ春雨の芽生えくへ日をさきなし

老人の若菜と云ことを

卯杖つく七草まてそかよひ春の山を辿りてつかの若菜を

寄若菜述懐

若れせる君の雪もちよ代をかれるしき世をまつもえむ

鶯のなきてわたりの谷のへだてには
くらきをいでて閑にすみし鶯も花のかをりにさそはれて
閑中鶯といふこころを
鶯のこゑを聞けるにそゝのかされてはるのこころ山さと
夜中鶯
鶯の声さやかに鳴わたる竹のはやしやみやまのかげにて
すみなれし宿にも鶯の来てなくなりにけり
梅がえにうつりし花の鶯のなきて人をやとふらん
鶯は花のかをりに誘はれて谷の戸出づる春の初めか
鶯は知らずとや思ふはなやかに人におもひてなく鶯
声のたえせぬ鶯の梢にとまりて鳴くこゑ
よみ人しらず

りし故の花のにほひに誘はれて鶯のなく声を聞くの
生まれし声の若葉のかげに咲けばこれ梢にも鶯ぞ鳴く
行きかへりつて鳴く鶯の声のはなやかなるは
春霞たちそめて行く人も聞くとやおもふらん
梅花
春まちて咲く梅のにほひの人にあはぬへき
山ざとの梅にやどりし
春雨にぬれて匂ふ梅の花山里遠く香をばたづねて
いかならむ梅は花をしのぶらん人ともなく
こゝに梅の花をかざしてにほひを人に見せまし
さとは遠くにほひて梅の花のちりかゝる
梅の花ちりかかる

けふのみと花をおもはんよりまれき梅かゝひと
　庭の梅すさりたる梅はみてしのふる
梅かはぬ山にもくるゝ咲ぬまていかならん人にあひまされ
いかにおもふ山のかけに御なかめに庭の梅かは
　くちはひかりは
春の夜はよりく梅か香ひきて やみしらるゝそまた梅
　梅に鶯の庵すみかは
梅かえにきゐて聞は鶯の声のさかりを
いかにあらし梅のみか香に鶯のなくはしらぬ梅のやさしかるらん
　ひのもとの梅
たんめんの花のこのうかひさしの梅か香ひそへてん
　かんさき 御の梅

何しかく来つゝあらは梅の花の匂へも人かしらすさかりを
　山さとの春あへみて人もなく人はみな
春雨の野をみにしられける人もなく分の人のみなみし
　船中海路にふして
何しかく岸の波の花さへ八重の波のまにまにかなしみ
ゆふはいつも海の道ありて舟の中にかなしみ山を
　海路
わたつみのうきまよりみえのひとつ人のたえ
　山家にて
山さとはしれは住みつゝいとひもすれは
　萬代
萬代の水は流ゆくものなれはひさしくなからへ

暮ゝ月のくもりかちなる霞にて
とほくておもふもみなかすみわたる春のよの月

山里乃柳

山河のきし遠かけてたちならふひなのものゝ柳

柳風にみたるれ

見渡せはさとのかきねかけて風にしたかふ柳の糸

雨中柳

吹くまに風のみたれて乱れつゝ雨にぬれたる柳の糸

水邊柳

水底にうつるみとりの色みえて風にみたるゝ河柳かな

待花忘他といふことを

春はなほわちらねんと山桜咲くらんころの花のゆくかたしられん

独山つゝも花にいめつかひなきことは

消ゆきも花まちえよ此山花ふもとあとつきまゝん

花紛似花

今さらに春ぞはけしくもよほしやまて待わひ侘さん
かへるさにいふれの山の嵐かけて風にさそはれてむかへとも
むかしのさまにみえかねるに
雲さそふいそくも散れて雲とも見ゆる花
雪とちるかにまかせて花みちのおもてもしらつゝ若菜
よし野山ふもとに霞てかすみ高く花とみゆる
花のいろやもしゆかしきかほりみよし野山
さくらで山の盛にみて白山花とまかりし
偽とてもいさゝかに此山花咲せてみわたのかせ

よし野山桜のむとみはよわりぬ物のあはれをしらぬ
わくらはにとはれし山桜をあらんとおもふに
ひとみれんとのいはれんとかけはしにて
白川の桜はみてそくさもりいよりいこころは
引かせてむかし春はもろこし月みる秋はさもあれ
むかしそ月ハくれぬ世のわかれ物は世にみゆる
よらのあはれむとし枝よりさくすれ桜の花木をかれ
かれはおもてみぬ桜のあかつきのよしの山の花盛と
桜のみ吉野の山をはかなきのことも花はみぬらさ
ともそむかしのいてなをんすて異てもしはつ
白川の春の桜の盛をみるにのこさくきく
是くはむかしの下にそ春をまんなとの二月の月のつら

件まん桜のも花なれはのあちは世は人にたらすとも
すまするや世はおもはるる花をとる桜の盛は
山桜花の花おもくはそて此春そさきまても風けりまされん
すゑ山やさらねのを花をみなれぬさもあれ
のちはなれはさえつらけれむかしはよそ春はゆかん
花くしの嶺のつきさよ桜をおしみ盛てもすくやちらん
さひおりそ風さえておもてや山桜の花をとつけてられ
すゑの風くそこりそ春にも此山をとへらつ盛ともる
今とわんむかしよつて人とつん世はのれて山にすまん
困すんとせうひそろ此もえんてのまんてとこそれ
ひえすしもあれ人のうつのこそわさら桜花とろまへみくはつ
もちちかんすこさん中わん又山のうひそれのうつろさへし

かささしもやさ子すみわりたるへのもえてよ山さくん
ましてきくわし聞てよみける
年経て若し持よ紅てよもくる人よあれは紅れ
ひの下まて月ぞみくよみける
やくさ帰ゑひのりまてあかぬ行く勝よ月はみなうちそり
春の明けのもみうつよ鶯の鳴けれし
ひのをりもうしそよそむくん鶯の鳴はしわが春の明おの
春はもひ成ならふ人しれせ夜のさか夜れてをし
よみうつよ
そのつのうもかよ年の春にわうし何よちえそらか成くかし
花見をとりふしも給
花つくよ行とらせ帰し此春花も給つけぬ和歌すうき

花の下の桜花和くよ咲さる給みく
ゆきてみむ花はいもと思ひと我家か春よあかぬ人よ
屏風の絵成人てよみうらよ春の宮人山はれて
むかへそう和よもて来たる人の見る風にもさくら
くら給
木のもとなる人たけ桜ひとそよすみて給けりあん
山寺のむさまりくろよ若成みりひおて
よの山ふきうつてひよ鶏のてもみけ春一ちりしよ
晩けし給うつよもみりしふわけり和すて
すらむ家よもの名をての君すなすん木花かうそを給成
然野人由りうつよやうえん此王子のむ面白き
かれし袂よううつけるか

はるかやまの梅咲にけりわたしまつみよし山風
せら院のむ露ふりかゝるしくにはなち
まけりてらんわしかりよもすからくもりしき山桜花
なし
一 まむてへかすまの人にかけすりけれ衣の袖ぬれまへ戻
上西門院女房法勝寺のむしみ侍りけるに女房
てかくれて帰りけれはかはすのひ兵衛の局
のかへしむの花帯ありし古きせ給らんとまうく
うたをやまのいつかはしよそつけしりけ
みえはむかし帯かひおもてかくとして雨にしたかふ
なし
いにしへ花のかをりを袖にみんむかしのなかにちかへれ

いつきんしてけちむん花まへの紙八重にけかしけり
けいしきんしにしてことゝかゝらんやさしく
ききらへる雨のふりかゝるむかしの下に車ゝ
まてまちらん
わかれしける縁のみそかに侍りけん人の給ひけるとなよ 日
世とのかれて東山に給へる白川のむかし
人さらひかへしてはりそのに花かひおもて
ちつ侍みて帰らんや桜む花ちらかしまかりなん
山桜花を
女御むの御堂かりめくれてやまゆきさき山桜
花のなをあ梅さらにみえるよ
勅とやくそくみな門のいはひしきもの花おとなね

隔りて絵はあまりし白川の家の北やまちかたかりん
いつそ乃れ世のおの北の山に花といひて花とおもへ
弥生へて侍とせしむと山桜いとさけくさえ今かは
よし野山ゝゝの下さすひく白妙八重の桜花あまた咲わたりん
山下風の本わけしつむも花あらいかずまさく水もえみ
吉風のむものかくさまへつれてしまへや風も花吹出て
春風ふ嶺のちら風にさふかへは花とちらさぬ花より吹
よし嵐山もつきくして暮こゆか花に吹とてまた吹
北や世れぬ俤さすも世あるにまつ地とおもあのやま花ものかや
らくさ世そらへくめ花し吉風のちかまには花と胡むさる
りうへめ花錦とまひてちわねもう世とはし今あらは
中見へとむかなすへ木のわけし河とはけそ我朋須らん

さらむして花さいさくちれの花ちかはいまのみゆれ
北しめとゝ北のけはすくあへまちりを花いつそくときゝる
梢ふて風のふいりやんをさ人花のしぬしくさのれ
いそくちつて花それに北のへまちてくしき吉ゝ雪は花
木のわけのもよそう花ゆもあれにあかいふ梢と北のへあつさん
本わけしのまひなくさねよりみ山路ふ海と芋かま春
名しみくそけよ桜花散れて花のさまつ春のよ代月
ちる花と北しむやと嵐わけてみらむ春の山を徒るまへ下
春ふく桜はらそてちるも花風わきうかはわきなきは
あまちらよ庭さく吹風らみさしそいつも花浦よや
むさまちゝはしそ梢のもすらあいのらや春の山の世
かえ月ゝぬ一ゑちまいてしかんも花北はすし風ともたへ

山上

よし野山桜に風の白雲の花かと見えて峰のあらしは
むかし見し春はすきにし雨にたえて風のうへにも雲
きさらきの花のもとにてむつき月の花にしのふ
むかしわか花の跡より春を経てやまのおくにも花をしめけん
庭のむかしに何となく跡をしのふ花をみるかな
風わたる花のむかしの春を経て庭に残るも川のほと
白川の花庭雨にしつかに咲みえて
みよしのゝ花のむかしを庭に咲しつかなる花の雪
吉野山こそむかしの春にも比叡の花の香
つゝきつれし
吉野のはなの香に嵐の花にあかくらん
雨中落花のあしたの夜の花ぐれ

春風のちりかふ花も見る人も雪に花とも見えけるかな
風のうへに花の雲かとみゆるかな
山桜花に風の花をしのふとも
雨中落花を
情しらぬ雨こそ花を散らすらめ
遠山残花を
しら雲の山の花ちる白雪に咲くそれかと橘の花へし
花のさかり十日余りもみつるかな
山の人の花をそむけてかへし白雲
山さくらみな咲くにけり
さくら花ちりしかもみ雪かと
あさつゆに桜のいろも消えにけりかな

見くらへし行さそひつれ行かれ花も山ひこのなく花
神なひの山けりむ花梢わたらふく風にはちるらん
かすかなる山のよりくるのみもれ
いさしちれと桜花かはくもりさくれ山花
風よくしなとかりてまなくもなかりけり
吹風のよそにて梢はわかれゆくらん人の世のむ桜花
なまくわたすらもの色とわれはあれし深きもの
なかし彼のめくりはぬめくもよりまちちる
嶺よりおちくる本さそ咲いくいくくもしらの花
山おろしに乱れて花のちりはてぬれは涼しきみゆ
白雲とみえつ山のかくやかなくすまし
みてなは花のさかりかし

わか宿に咲ける花をわかれゆく人にかくしのはなちらさ

菫

故郷とてあさちかはらにはる雨に菫つみてん
わかれむかしの色のくさにすみれの人はなかりけり
さりし

春雨のよそほひの山へ人折とすとてかくらむ
うつろふ

浪水にたつかれのわれなれや人なきさく
山路のつゝし
くひくらぬもてはるとのまゝにさく花さか
咲し山のひかりけりやみけり
咲し咲山の花かけたく人ぞとなく花の花さかりなる

款冬

きし遊みゝ人々そうめきぬきさらぬかふきにける

山吹の花さくさとはちりぬとも花さかりみえてちりもかくる

蛙

ま菅生ふ山田に水をまかすれはうれしかほにも鳴蛙かな

みさひゐて月もやとらぬにこれる江に我すまむとて蛙鳴なり

春のうちに郭公をきくといふ事を

うれしとも思ひそわかぬ郭公春きくことのならひなけれは

伊勢にまかりたりけるにみつと申所にて

海辺の春の暮といふ事を神主ともよみ

けるに

過る春潮のみつより船出して波の花をや先にたつらん

三月一日たらて暮けるによみける

春ゆゑにせめて物をおもへとやみそかにたにもたらて暮ぬる

三月晦日に

けふのみと思へはなかき春の日も程なく暮るゝ心ちこそすれ

行春をとゝめかねぬる夕暮はあけほのよりもあはれなりけり

夏

限あれはころもはかりはぬきかへて心は花をしたふなりけり

夏のうたとよみける

草しけるみちかりあけて山里に花見し人の心をそみる

水辺卯花

立田川岸のまかきを見わたせはゐせきの波にまかふ卯花

山川のみきはゝ人の家ゐをも卯花垣とやよそに見るらん

夜卯花

寝しくふ月のさかのあかまさくれなかりけはいかにもあ

社頭卯花

祢くさのかりは常にあかれゆきかりにみ卯花

無云なりけ比郭公の初こゑと聞て

時鳥人まつさぬおもひはやさくらくにはつねかれ

不知問子規といふ歌苗我往きて人こそ遠かれ

郭公卯月のはつねはいつかきかむとなきわたるらむ

夕暮郭公といふ歌

まちわひしまたそなきつる郭公さそひえてこそ又あかしけれ

時鳥

けふもとよむ郭公なかなくてこそ山郭公は谷をふかみ

聞けは聞くさらに時鳥ひとこゑのかる谷うちのみそ

時鳥すめる人のいつきやそしむ人月のいつ

人まつれて

まつ人のいふともしく郭公なきてやよ歌

郭公とまらて鳴ねとよふつく鳴らは

ゆくさきにそれの鳴わか夜のつけてかはつねさき

時鳥きゝて鳴わか夜の更けてし鳴のこゑしらぬ

時鳥ののこさす前によみける

郭公きくもあかれはしれひとも郭公山路をわかせた

待しけし初声のまさにふかれぬ時鳥なれ

きゝとくへ給へて郭公まさの山みをさしなき

大井川ゐるの山代郭公のみたまきのほかまゝ

郭公なほさこそ山路はまつらめとありとやとはん

時鳥稀

わくらはに深き夜すがら待ちしかどたゞ一声はかれ
時鳥まだ聞き初めぬ今朝の空に初音待ちつゝ鳴く
わすれじよ過ぎし夜半をも時鳥なほも忍びて人の声きくらん
うちつけにのぞけば今宵郭公まだ待ちつれ
郭公ももちどりにはまされども

海辺時鳥

浪のうへに郭公待ちし夜もすがら
時鳥しのぶの月に鳴きすぎて五月雨

雨中時鳥

五月雨の晴れまをまちし夜を深み山郭公鳴きてすぎぬ
山寺の時鳥なく声しきりなり

郭公こゝろをかけしまつ夜半の秋風にさそはれて
五月の晦日に出でゝ夜半待ちて
時鳥まだ鳴きすぐる
ひとつこゑしけり

時鳥なほおもひそめて待ちつゝ

暁時鳥

まだ暁のみさゝぎ
さらにおもひそめて

五日

けふあやめの人のつゝまれし
ある野の中にも
また深きの

海ちかやしまさきのあまとともにさみたれのころ
うきわたるはやせにかけてさみたれに
五月雨の日も寺へ入れけふもぬるれは
あさつゆのしらけにけるかな
雨ふれのこやそのまゝにまめ哉にせ
みかんのはらさいあやめ草よりもそよりかな
五月雨の頃のやとにむかひてやのはるれのあやめ草
五月雨
水まさる入江のあしにかりてむすふまくら五月雨の比
五月雨にみなとはかりの浪やくもりてたよりなき川の白波
ともし吉里をいちはやみ波又さそふも五月雨の比
ちかくこえむかしのあしたとさかりてはとのくもりて五月雨の比

東屋のとりをうつれはさ水まさるさみたれの五月雨の比
五月雨は小田のかはつの声やせぬらん
五月雨の比ぞしるらん小田の人々のおなか水ぞいるかな
あかくをさし五月雨の舟さす宿に人々こそ
五月雨は打はへてもかゝかりて水増人
五月雨はいさゝ小川の橋も見えぬまて
水まさる淵川ともみえて水底の草まさる五月雨の比
ひろき瀬川のみなかみのみおつくし水のさかさ五月雨の比
いさゝ川つゝみのさしとかりそのみつかし五月の比
夜もすから瀬江のあやめかせいつくと又五月雨の比
舟人もみなせの声まさりてしら浪五月の比
水底にさへ浮くさのみくれて水の面にいてゝ

五月雨はやむ晴間もなしあやな木のまよりもる月のかげもなし
五月雨ふるさとはあれ行さへも人ぞかくしげるらん
五月雨の晴ぬ日ごろのうさ晴て浦の浜には水まさるらむ
水まさる[illegible]五月雨のころ
五月雨は人をも[illegible]
五月雨は山田のあぜの[illegible]
[illegible]小川の[illegible]五月雨の比
[illegible]五月雨の[illegible]
ふるさとのかけみ
[illegible]
水邊納涼
[illegible]白川[illegible]
水の[illegible]

深山水鶏

仙人の苔の[illegible]水鶏[illegible]

題不知

夜山の夕月の[illegible]

撫子

[illegible]

夜中撫子[illegible]

[illegible]

夜の[illegible]

み[illegible]原の[illegible]

撫子[illegible]深[illegible]

撫子の[illegible]夜の[illegible]

行路夏といふ心を

夕暮のあかれし原をわけ行すゝむ末遠き野の流
しけし

とりしまるかくれ行ぬ風わたるゆふくれの寺の夜
よ

題しらす

夏の夜は迷ふ小竹の露のまにさそふ風も吹かぬ

夏の夜の月みるよりやまかせん故も知らぬ

海辺夏月

夏の夜の苫のあたりに月澄て秋を知るらむ須磨の浦

泉にむかひて月をみるといふ心を

むすひあくる泉にやとる月影はあかすも結ふ夏の

りまつのまに涼しき清水にやとる夏の月

夏の月をよみ侍りける

夏の夜はとけぬ原に吹そよく月の光さえて寒けき

山河の光にせきとむる浪のあやをりそふる夏の月

池上夏月といふ心を

新しき月に涼しき池の面に夏の池はつらら結ほる

蓮池にみてといふ心を

との月やうつるらん池の蓮の花咲にけれ

雨中夜月

夕立の晴行月に玉ゆらも涼しき蓮の露ぞ

涼風如秋

南吹きむかしむ風に秋あはれに夏の山の

雲風如秋といふ心を白川の水の流れて

又水無月秋隣なりといふ心をよ

夜風のすゞしさになかなかに水無月は秋あはれなる心の成

山家待秋といふことを 紹

山ざとは竹田の原の夕風にまちえたる秋の思ひこそすれ 紹

六月祓

みそぎしてぬさとりながす河の瀬にやがて秋めく風ぞ涼しき

秋

山ざとは目にも見えねど秋しらぬ 紹

あはれの色なき物の情ある心のさびしさ 紹

山居のさびしさ秋はさびしといふ 紹

秋はたゞ人のつけたる名なり山里の風のさびしさ

ころしのさびしさ 初秋風を聞て

秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

初秋の比ある所にて松風の音聞て

常よりもあはれなる秋の夕風にまつの声ぞむらさめ

七夕

いかにせん後の朝に恋しさはまさらん物を

逢ぬ身の今日待つけて七夕は行あひの空やあかぬ別に

天河の七日をまちてあひみる七夕の心ならひ

あまの川その夕暮にわたるらん

待つけて行かん七夕の心のうちの空にしる

蜘の糸をかけてみる

あはれ七夕の竹の葉に乗る

草花道張といふことを 紹

ゆふ露をはらふ人こそなかりけれ濡てをりぬる秋萩のはな

野径秋風

まねく風に野をわけ行ば露におきしく萩の下葉

草の原時雨しけふはかりける

いかにしてかぜのたよりも庭のうへにかよふ秋風

行路萩

旅人の袖にうつろふ露もかれ行萩の下葉の色ぞ見えける

霧中萩

おほゐなみ山のすそのゝ萩の露ふかき秋霧

霧ふかき野のはらにみだれてさく

秋萩の下葉にうつる露の袖とぞおもふ

萩野によみ侍る

咲みだれ人もこそめの人もをしむ萩が花ずり

萩原の露よみてかへる袖にうつれる萩の下葉の色

野萩似錦

けふぞしるのべの錦は萩の露

草の色はみなもみぢけり

しほれ萩のした葉におく露の袖

薄路

しのぶ人にあふ道のしるべとぞ

古籬苅萱

笹の葉の霜もかれゆくまがきのかるかや

女良花

まくなくて花すり袖とやしはふや萩が露やめてぬるゝ袖かな
よそにても色めく人の風情しられて露やこぼるゝ

草花露重

と鶴みれぬ露の玉まくはわが起おきてぬとまなべしるき
大かたの人の露にはこころおく袖のみさえとなりにけり

女郎花帯露といふ心を

花の枝よ露の白玉ぬきかけて折る袖ぬれぬとまなべしるき
花ならむ袖そぬれけるとまへし露をおもひ知らるき

水辺女郎花といふ心を

池乃面に影をうつしてまろふ水のみ見えける花の色かな
ころひかさむのすゝき女郎花も池のさみだれそみか

女郎花近水といふ心を

とまりし池のさかりに枝ひらて物むかし袖ぬるゝなきと

萩

まよふまもそ萩まさこゆる萩にみえし秋の夕暮
とまふてて木末の末に露まされる萩そ萩咲のけれ

萩の風露を払ふ

とふ手に萩咲の色に夕露はらひてやまの萩の下風

隣の夕べ萩の風

かきわけて萩こえにいひゐるに萩ちる萩の夕暮

あさの露に見ける中に

咲にほふ萩とひとしめてはすゝき萩の夕暮
我宿の秋にいろ花のあはれとぞすむ萩の花
何すらん色いろ野分にかけて萩の秋の夕暮

何となく物かなしみは身にしみて風の音秋乃ゆふくれ
賤の家ゐあきのよ
ねさめしてきゝすましたるいかのねの秋をしらする衣うつなん
わさのうちは霧とさむしとて
大かせ霧ふく何のうちもしらすにさくみさえわ
山里よ人もまかりて秋風にさよみたるまゝ
山里の雨風吹ののあさきまよそうろ露もきく秋の野のれ
人こあさのうち十五日よみたりまて
玉まめく露いさあれて武蔵野の草はしらぬ秋の野風
わか出てまとひし露すゝ夜はやまされて在りをしむる
思とてその人は袖にみよろしかる物出て高き闇々わ
東のゝ小笹の露そのかのや宮みうち秋風久くれ

晴やらぬ山に霧のたちこめて麻のかゝ見えこそすれ
月そらの橋の面渡す雲間うしろきま山へのこと
麻の衣ぬきまかせて空の月かますみわたるかな山里
雁なきわたる月のかけそその山風吹きむすふかも
いつのまか庭の小萩の白露とりおきてやとる秋風よの月
何となく心とゝ涼しき紙すみさそれたる秋つゆ

月

秋のよ風もあはれそふ泣の夜のしてさやかの月夜まさる
あまのとやはやの雲の露で吹風吹くもの
くもはれや清く上うみの空はまた山のいろに千代にのは
中くもつくしそまをかきさくまゝいかね秋の夜風
いさよひのかけの雨あらきもの月をそむすひけふかな

しかまなるこのみ浦にさすらひてわか世のなかの月をなかめん
月をみしあかしの浦の雨はれて浪のうへにうかふこそあれ
いさよひて出る月のかけそへて山の端つくしそれ
木の間にやすらふ月をまつかひあらは山のはあかるなん
さらしなや姨すて山のうへもあらし月よりそ冬の夜の月
ゆかしさてよひのまくらにはてもなしみかきしあらし月影
あまりにてき道の露ふかきよりよりひかりつゝあかる秋の月
秋の夜の月よみさえの寒るは夜はなかれなかれつれ

同し月似類といふことを

月すそさし入けるを雨にくもらはれき秋の山かし

海辺月

清見かた月すむよはの浪さやかに秋の絶ぬれ

池上月といふことを

見さひのあを池の面みれはやさしかれる月にさむらん

同し似海眺望まてひとくしみかくる

やましるや月のかけあかさしつて入はての池
池のおもにうつる影をしのひのみかけの池

月池の氷といへるを

水すくそ氷をしらぬ池のしもる秋の月

名所の月といふことを

清見かた沖の岩こす白浪に光あらそふ秋の夜の月
まそてみる石の名ともやましるしはらし月の影

海辺明月

難波かた月の出しほにさしみちて蘆の葉すそに氷かかる

月前よしのとむしろこそ紙

今宵かも月のまへにさまざまのむかしをおもひいでゝ

終夜月紙みる

誰こそかん月のまへにさまざまのものおもはなる

八月十五夜

山の端の紙出かよひわたるさびしさにおもひするもみぢの月

こゝろへねこゝろ山の月のみぞ思ふ秋のはじめにぞこゝろ

天川かはよりわたる山の月にこそ見えし

さやかなる影をみて秋の月とよまれなんあはれ

うらみはまたこむ秋の月影にかなしき

あきのこよひ一夜の月をみる

せめてこよひ十五夜の月を見て

くもりなき十五夜紙

月みれはみれはまつわれてしかし思ふはやみまつ

月前思ひをよみける

八月十五夜人はなかりし山の月はみる

清めてゆく月のみぞ秋のこゝろ

秋風のあはれ月をみるこゝろ

こゝろそ恋しき月みれはおもふ

ありしおもひしはやし月みれは

月みて恋しき人をおもふ

山のはの月の秋風

人をこふる山の月を

木のまよりもれくる月の影をこそ嶺の

いまやせん今はと袖にやとさんのすめる月みてゆくなる[illegible]
くやしくも賤のふせやにやとしけて月みる袖はしほるなりける
あれはてし草の庵にすむ月と袖よりつゆはあまりける
月をみるこゝろはいまもむかしのまゝにすみわたりける
かはらしなむかしのまゝにうつりけて見る月かな
ふりすてし月こそ袖にやとりけれ昔の秋を忍ひわひぬる
かくおもひおもふのけふそゆふしくれ袖と秋とはよの名残
ゆふ暮の月は光もみくもりていのちのなからものなりけむ
月かけのさして山路すゝめはむら〱ひかりやすむ秋の花
すゝしさは霧もなかりけるわかいつとせの名残の月かけ
わする心の月をしたふらんあはれさの世にてすゝしき
夜もすからなかめそひけるしみすくなき月のかけかな

月のくまのゆきはおかけにまかせてかきなして
高砂の尾上の日山をわけいる月の光のみ山の奥なき
有明の月の比は晴れゆく秋のよなよなのかすかなれ
すゝしさをきはみよそれ月そすれはてなかれ
遊ひかねし野辺にねよはれや月まに風さえて
さゝくれ山をわけこえん秋の夜の月の光のひかりの名残
それをみるこゝろのさむ袖ひらくよそ秋の夜の月
まさに海しきよ月のあはれさは人の心にそうつる
いまさらに月の面よりあかぬけとをしき夜そむかふる
おもふ名残いまやかなしきまゝ見すみをのそむ秋の夜の月
空はみなはれてあやしきのなからの月の光
さらにわかれとかくすゝみたる月ゆりきよき名残

中〳〵にすゑもみせてそ猶月ハ見えけれよもきのかけ
うらさひしの月の西はなれゆくやくるゝなるにわかれゆ
色やしろき月かゝりけるさえいまよしみねの白雲かゝら
いくたひまさりてゆくさかのそらくもれて月かけなる秋の夜
色こしみえて月のみかけそ見えてけるなる秋の空
心ある人に月のかけをみることありけんさきの山のはかし
月さへ跡かものゝせしに風吹ハ氷のうへつまむ白妙
天の原ふりさけ出し光とみえしをえてそ秋の夜の月
なをさりにもかくれぬは秋のよの月夜すから明なれ

九月十三夜

こよひのたのしみえてそまちまちにし月見えけりそ白雲

後九月はつかあまりの比よみ侍ける
月みれハ秋くははれる年はあれとなをこそあかね
月似霜
久月と紹
秋の月いまも山のはにかくれなてそ
月前薄
月前荻

月ならむしま人さしもしらぬ嵐すゝむこゑ秋の山嵐

月照野

月すくは吉野の宮人かへりのへまたもとめぬらん

月前野花

もの色深けゆく夜半秋の花月夜の色わかみえ分

月前草花

月の色ともかさねて女郎花しらぬ露のをきまよふらし

よひの間はまだ花すゝき女郎花むすふ露のかゝる袖

月前女郎花

夜さむゆふ月をわけゆく女郎花もあかぬあはれをみせよ

月前虫

月の夜はむしもあはれにまさる蛬なく秋をこそしらん

おなじくはわかきの萩の松虫の

深夜聞蛬

秋よさむやよ更けゆく月とともにつれなきやまのねざめかな

田家月

外山なる小田の庵はさびしくもたゞ月をのみ友とやはみん

月前鹿

さびしさにたへぬ鹿の音も月夜の色にまさる山のみね

月前紅葉

木のはちる山の月かげさやけくは紅葉をのこすあらしなりけれ

名所月

月影へてかゝるあしたの

たつた山月もむ嶺の紅葉ゝをかさねてみする錦なりけれ

月前古寺

月前古寺

いつく山のはにいて出ん月をいらむ世をすて〳〵
　月すみなれてわか心のくもりなし
世中のくまなきてすむ月の影は紙ほと見えぬ
世中はくもりてあきの月をいれやさらにみかけても
いつかた月すむ秋の夜あれたる人にさらにすみかな
さらぬまにうれてあはれの心をとめて秋の月
捨ていつゝ世に月の夜あはれなる夜をもとむ
あまつらよ山のはをもとめ給へ月のひかり
　青ゆく雲のわけつゝ書きたる月あり
さりとけ人の心そまされけれはみさらに山をさへ
　月寺のあかりまかすらむ
今宵の月にあひ給ひし御やからの後に

人の紙にも御心の月紙数けりし
きさの夜あくる月とまして紙雲の
ゆく中の月紙けむ中にもをりて積のゝ
　猿猴のわけにも御心
あまの紙まてみしるしたまひそ月にあひぬれ
みよ雨の中の紙をよりてまかりて月を紙とぞ
　猿猴の月紙をわくとも紙
月は秋もなくましくまやまつて紙もちひくなしかの
　月前にあひて紙
わしさはまの御心あそて月にも紙
んさまにありてあさ紙一言人紙
のちしやまにぬましちとあはれて紙人

山上

くもりなき海のかゝみにうつる月の影みて
はのかにもえんまかせておもふ身を海はなれぬ影をそなかめて
詠つくして月にあかして鏡をかけたる人のみる哉
かすみよりひかりさしくる月かけてすむやなれは秋のもなかん
望前の月といふ事を人々よみ侍しに
わかれ行人のみるくもゐの月よりもとまるまのひねのとこよの月哉　雅経
月やとるあかつきかねのはなのまに秋をさへしる鐘の声かな
秋はまた月のさかりのかへるくもゐのかげのすめるにそゆく
船中秋月
明石かた八重の潮ちをわけ舟はまめのうらをさして神のみこそ
朝に秋月をきく
あさぼらけかすむかたの風に別れし浮舟のまを山をひとつの鐘の神のかたちそ
秋に入て月の歌ニ
みなとかくまへるかけにて月かなしみて見る夜やまさる
月を聞て遠山
白雲と見えしかけてもかよふ月の門ゆく鳥の夜のしらぬとそ
むかしの月のつらさにみてうらねおもふさへ鐘をさへはなれて
鐘中月
宮中の月をさしてまたうかへぬ心にはくもゐの鐘のこゑもさえつゝ
鐘上月
鐘の音かさなるまにまに秋しもの深きのこと
鐘
難波行客と人に聞きて
夕されはかさなる人をまつしもの露をはらひて袖ひとつもなく

山家霧

立こもる霧のしたにうつもれて いつくともなき山人のこゑ

よそにみし竹のあみ戸は立霧の それかとはかり人も来らし

鹿

さをしかの萩のふるえに風吹て をのへにちかく妻よふなり

萩か枝の露にしをれて秋風に なきよはりゆく鹿のこゑかな

夜をこめてひとりねさめの鹿の音を 聞もさひしき秋の山さと

さひしさは秋の物のあはれもしらぬ身に まさるものとや鹿の鳴らん

山下風に鹿のねそふる夕暮は 秋のあはれもいかにとそおもふ

鹿の音に空も心もあはれなる ねさめかちなる秋の夕くれ

まつ人もまちえぬ夜はの鹿の音に おきゐて秋の山さと

小倉山の麓に住て鹿の声を聞て

きく人も秋の山のさひしさに ひとりすむ身の哀をそしる

暁の鹿

秋の夜のねさめに聞そ哀なる 鹿よりさきの鐘の声

夕暮に鹿をきく

立のほる雲の上まて聞ゆらん 鹿の声する秋の夕暮

幽居に鹿をきく

まかきねにふしなれてや鳴鹿の なくねをおもふ秋のさひしさ

田家の鹿

小山田の庵ちかく鳴鹿のねに おとろかされて守る人もなし

人住て小野の庵はけしきに 鹿の声する夕くれの空

鹿のねをきくにつけても行人の 心をそへて秋の山さと

独聞搗衣

ひとりねのよさむをかこつねやの外にあはれそへても虫のなくらん

蘭里擣衣

きぬたうつおとさへさむしひとりねのつらさをそへて秋かぜぞふく
年比すみし人の住居も絶はてゝ鶉なくなる庭の秋風
けふよりは庭のおもにみだれても虫の鳴ねのいとゞさびしく
身にそへし袖にも露をおきそへて庭に虫こそ鳴わたるなれ

虫のこゑよみ侍りし

なきわたるやむしのこゑこそ哀なれ秋のよふかく蓬ふかれ
秋風によするなみの庭の面の下葉に虫のこゑ乱るなり
蓬生の中によもすがら袖ぬれて虫の音聞く
秋風のふけゆくほどに虫のねのかしましきまで露ぞ置ける
虫のねもしだいにすみて秋の夜のあはれは袖に露のこほれし

のべにかくれしかれのまにまに鳴虫のこゑのみぞする
秋の夜にねざめがちなる袖の露を虫の音ぞしる
あさぢふにひとり寝覚ておもふにも虫の音しげき
秋の野の花のにほひに袖ぬれて虫のこゑごゑ
よもすがら袖に虫の音をきゝて秋の夜の白露
ひとりねの寝覚の床にさむしろに虫の声きく
蓬生の露に虫の音しげくして秋の夜ふかく
虫の音もしばしはやみて秋の夜のあはれを
秋ふかくなる虫の声のさびしくも
虫のねもさのみ夜すがらなきやまず
物思ふよはねざめがちにて虫の音をきく

獨聞蟲

ひとりねは友なきものと蓬生の露けき袖に松虫そなく

松虫

まつ人もまたぬ人にもわかれけり草の枕の虫の音そする

夜中虫

夜もすから小笹の露に乱れあふ草の葉ことに虫そ鳴なる

田家に虫を聞く

小萩咲山田の庵の虫の音に露なりまさる人の袖かな

夕の庵は虫もかなしくふく風に

うらみわひぬ我のみならぬ夕暮は秋そかなしき

田家秋夕

かりそめの袖にも露をこほしつゝ山田の秋の夕暮

吹風も心なしとや山里の秋の夕かな

京極太政大臣中納言に侍りける時菊をおほく

うゑて侍りける時に島にまかりて菊をおほく

植て侍りけるに九月の南殿のひとつ家

に侍りける人々に公事に侍り

まかりて菊のさかりに

あはれ

色かはる秋の菊をもひとゝせにふたゝひにほふ花とこそ見れ

菊

いく秋に我あひぬらん長月の九日につむ八重の白菊

秋ふかくうつろふ菊の色見れはしもをかさねて白菊の花

月前菊

さやかなる月のかけにもまかふかな白菊の花

あさ物へまうてける道にて

なかき世をたのみし秋の夕くれ
堀河に行けるに浦にやよひの秋あらは
渡りけるに紅葉の蔵のうちけはかれし
立しらぬとまりのかよひ紅葉のぬれて八重藤

題しらす

いにしへの紅葉の色はさしへてこそ時雨にまつらん
紅葉末遍しらふしく哉
いもし山時雨に色をそめてこそ錦なりけれ

山家紅葉

まそれは紅葉ばの錦をさらしみしは山への
あきのまきに松虫の声く秋そかなしき

さくらさくよりわすれし松虫の秋のよをさへたのしき
根のなれくれはもの人はいかゝせん虫のねのみやあらん山さと
参蓮高野に詣てける山の紅葉をよみし
よみける

さゆくに錦のいろをみ山にもみし紅葉の時雨をそめける
紅葉色深しといふこと哉
根のなれしいろいはいかに時雨つゝまとなき時雨ふりにし
りみしをれは時雨のりぬへはいかゝならむ色の錦

霧中紅葉

錦いろあふれかくれみきぬにへる霧のやまかけの
賤かくら家に夢の紅葉の色はうかとの
思くらまよしあの峰のもみちにちりし紅葉に錦なりけれ

寄紅葉恋

秋ふかみ河原風寒き人や紅葉ば色の袖に涙之歌
あつまへ濡らしけるにこそ人のおもふに別る秋
のかゝみらん

ときは松のみしらぬ錦のそて紅葉そ秋ハあはれなるは遠

草も地路落葉

紅葉ちる野への錦きて行人はむすまく錦さる木
のこる梢の木もれにこりれてよみ歌

大井川井せきにまかす水は色に秋深く成ぬにてそ

とくし山やまに秋乃色にわれや梢に錦流るれ

秋山に秋の錦をおらしみやこへさし家かへるしらん

山さとに秋の末とそ成にけりなからこし也風

高雄にも秋のこすゑはみしかともみも紅葉ちりまさる　のこる
秋の夜の月やとりけん山路のくもしはむ今日の日くれ

後乗あさ錦寺

ふりしく錦の色を人とらしれ所や露もむすはむ

冬

長楽寺にて乗紅葉といふ事を
よみける

秋のすゑつかた吹嵐の河風に紅葉ば

神無月木葉は落つくしても行見山への

題しらす

ねさめする人の心はわのあれたる家にとこよりもさる

十月しくれて山さとは雨ふりけらしま

蒼の海はれゆくすゑに見る
あらしにも薄き下紅葉あかきさへしらぬころかな

山家落葉
谷のをしやまの木葉ふきみだれぬ嶺にはや秋のこる紅葉かな
木葉ふる小柴の庵をあれたる山のかけ路を誰か人はふむ

暁落葉
時雨にはねざめをさしもまさりぬは落葉の音の木葉なりけり

水上落葉
立田姫深き情のちる影はおもしろふ山川のみなれ

落葉
あしはらく庵の落葉にまかせて待ちつつ成りけり

月前落葉

山下風月に木の葉の紙吹きしづきてとのみにけり

瀧上落葉
木枯のみねのもみぢやちりぬらむ音もすごし瀧の白糸

山家時雨
やどりしてあらじと思ふ庵の色は秋の上ひびきて人しかにしぐるる

閑中時雨
とをくそり嵐すぎゆく軒ちかく山めぐりする時雨をもき
時雨のふる夜の空にも見えぬ
あやの木のはにまがふ時雨そ今宵こそ人の袖にも

落葉所しらぬ色
紅葉ふらぬおしみのもみぢ色の紅をみかのひとつにも見ゆる哉
山家枯草よりうつり花僧都此坊にて

よみ人しらず

さゝなみやしか(の)から崎霞たちゆく春の海のほとり秋ぞ来る

野の緑は枯ぬる草もいつか秋林寺して

よみ人しらず

梅の花咲まがふみしの人は相見まほしく霞たちわたる

枯野の草　紫よみ侍る

むかしより神の宮居のとめきしは猶みだれ草かな

霜がれの草葉にのこる秋ならで冬枯のこる

霜がれてうらゝかなる春の緑をまつはなほ冬なる

冬のうたとてよみ侍る

難波江のあし枯芦の霜さえて風もさむき夕暮の秋

まだ見ぬ物のうへにあはれてならぬ冬もとさむる

山桜神のみむろに咲にけりはなさかりゆくあはれなるらし

あはれとや人のみきそ春霞春の山かせ

水邊春草

雪まわけて出しもえし若草のかげのみどりも難波江の春

山かげの水にうつろふ月影にけり

玉ほこのみちゆく人の宿かりて袖の春雨

夏更聴蛩

こひわする夜なく声をさむけさに月のかげも寒き夜

山家見月

見る人もなき深山のかけはしも山里のこの月はさえぬる

月出る嶺の木の葉を分け入りて月の光にはるゝ夜半かな

月のかけかゝる草の葉をてらしけり

ちよろつやしろに新月かけし月は霜さへ
氷しく沢の芦原風さえて月もさえたるさゝけなし

江川ゐるよの冬月

霜さえて庭の木の葉も(?)そてを月はみつゝやまよふらん

庭上冬月とりつゝ行

さゆる夜のみしも冬ふかくなる月かけは水なき庭に氷をそしく

鷹狩

あられふる木の葉かくしの狩衣ひとへに挙(?)たかなき

雪中鷹狩

うちはらふ手もなきまゝにみかりはの雪をとくへてやる

みかりするしはのみえすも(?)狩かくれてかりは冬かさみ(?)

夜神楽

月かけはまたあらぬ山のはにそしむまもなしうつる白雪

庭雪似月

あはれまた月のかけとみゆるかなふりつむ庭の白雪

雪の朝霊山　よし不しそ晩ふ鐘(?)てよみ路

きけの朝鐘の音かけのうちまくるあかつきのみ路(?)をみ

枯野の雪ふりつゝ行

冬かれのやかてまかふ雪にまよふみちのあはれ

雪似花かくよみける

わかな山さくらしくさくちるまてうちとつて雪とやしら雪

冬はゆみけるはなや(?)ともつもるまくらかの雪のふかき雪

雪道行人

ゆくゝ雪にしをりしはてなきあとにそゆくかねみゆる

あさぢはら野への宮へかよふしみちあまた
まつさかえん人のかよひ宮ゐかはそのち
よつぎもしけり
宮ゐしてうつるそのかみ紅葉の錦をさしかざし
　宮朝待人といへる心を
待やとふ庭のおもかげひさしく暮れてみん
宮のまへにあらはれてせんそく面白からん
今はときとしてみやつかへし給ふまで
みやゐするなる時はいはひてかしこみて
人こゝろすめる宮ともなれるまで詩をうたはれ
　宮祝といふことをよめる
おさまれる御代のとしはあまたの

　雪埋竹といふことを
宮ゐして見る竹むらも雪ふかくうづもれてさくらは
留まれる時の色にはなりぬる雪のふる御門
内裏まへしたへ竹の雪に埋まり宮ゐして
こゝろみてめぐるみそ
いつもときはの竹に雪のふりしかば白妙に
　社頭宮
むかしは神の宮ゐにうづもれて宮にかよふものの
　宮ゐしてときよみかへる
何しおはんとをもとに山へかよひて
宮ゐしてながめむまつのかはらぬ
かはらぬ山ふものむかしながらの

卯花のさかりしられて山かけにのこれる垣ねの雪とふむ白妙
おりふしぬめくりのさかりもやしれく花の色そうつる
しら雪のまさるとはなき庭の面にさかりのさくらしらぬ春かな

舟中霞

さしわたるかしもとまんせよかしはとしまちかくるまに

深山霞

むかしへのまつのはちらぬそのかけにおとまし物にあかれぬる
さくらのはまかくれにちらしをはみくく

たちならてそとつくる家のつかに花ちらんなりて

月前落葉

ゆふかけのしたつゆしく

限あらむ空としてかしみ落葉ふかよ月はすゆけぬかな

千鳥

あくかるゝいそのうちの浜のまよ千鳥なくなり浦風寒み
あくらきさまれ浦ひかれし霜に夜ふかくなかぬかとくる
とゆれてまんかりくそ河あま沖千鳥友よふなく
あとさりて汀の千鳥ふかよひもかけはなくなりなれ
やともとはみなれなし月かけて浦の千鳥そなくなり

題しらす

あきもなく志賀の浦風しくまむ月とのそらしてみるこまし

氷留山水

志賀の山の木葉のしたかくれ山水をもかくらむなか水の音

池上氷

水なるかすや氷をむすふらんさしあらぬみとぬし池の白氷

氷

氷さへ結ふもいはへし所

氷ゆく袋のさはのまかられくりやここ毎しかき流れ出ぬ

冬哥十首よみけるに

ちりはてし紅葉よちらぬ山もなしさむくもみち入冬もなき月

ひとりすむこゝ山のはなすれやあらしまゝもみえて月

深山の霜かれのむかしさむさもつゝきれは

まゆら雪もれはてしもけく氷まけりきこ春れ出来

笑のまゝ花の山よ風さてしえまなるよま氷こそさらく

清くゆるしれはいぬさしくなるやれみなゆくとあらく

山さとは時雨しものさりしきよめられおく都省らなる

風さしてよもすれはやそそ氷ゆくぬるきさ三瀬ありく

まれ山のよしよゐ宮まつくむらすみてや花ふて毎し

花しとまさくかしましもけむへし雑あるさもむすき

題しらす

山桜およひてうしれく本より花ちは宮居らん

仁和寺のよむろにて山家閑居見雪といふ

ことを読侍りし

すゝめりし宮にわかて来そきては雪へさよ山家

山さとは冬深しと入てしそ

よひと神宮よりてあらしつゆ道にしてなかき山家

山家雪とらふてし

しもの色はしふくさしよわりし宮よ山家せきふく

世をのかれて人の毎のかゝまゆらなくまふ

ひの氷そ水まてここらのくなよまひちまそ

ハらぬゆらりしをしけりは閑てまる

いかはかりやこゝろのうちのすみなれし[illegible]

陸奥国にてとしのくれによめる

[illegible]年のくれ哉

山家歳暮

[illegible]年の[illegible]

東山にすみ侍りける比年の暮に

[illegible]

としのくれ[illegible]人のゆくへ[illegible]

ともすれは月日[illegible]年[illegible]

山さとは家[illegible]

歳暮の心をよみ侍りける

としくれて[illegible]年の暮哉

[illegible]

ゆく年[illegible]

恋

名所関恋

わかこひは[illegible]関[illegible]

白河関恋

[illegible]

涙顕恋

[illegible]袖の[illegible]

夢中恋

[illegible]

[illegible]

おもひしれ我こそ人にしられてかくしのひの別れかたみの
なかの契りのかたみもなくて我をおもひしれ我ならなくに

後朝

とりのねにわかれし人のおもかけをうつしてのこれりとしる
あさつゆに我袖のうへはしほれて通ひ路の露にぬれつゝ

後朝時雨

きぬきぬの袖やしれぬ涙にぬれて人をおもふ時雨のそら

後朝見梅

うつりかのそれにもまかふ梅かえにわかれし人の袖の香そする

後朝鶏

やすらひてたつ夜のあけのはやきをうらみてなく鶏の声
ふるきのつらきの時雨

しらせても我が別れの人のつらさに時雨てやみぬる

逢不逢恋

行かへりあふせは河のなかれても今はたえぬる人のうき
よそにのみきくのやまの峰にたえてはかなき人のゆくへ

恨

うらみても袖にかゝる涙のつゆの身をしのふの中のたのみそはかなき

互絶恋

つらきをもうらみし袖の身をしりてたえぬるなかの人の心そ

寄糸恋

たえぬへき人の心のいとはしくよるへもしらぬ身をいかにせむ

寄梅恋

まつとしもなき身の梅かえにたのみし人のにほひそふらし

折もれにゝ一えだおりし梅の花かくて袖にもうつりける哉

寄花恋

つれなさの人にみせばや桜花にほひにもたとへんかたもなき

花とみん人はこよひにへだてぬるつらさは恋のゆくへ付

寄弦恋

たえはてし身のうき世にもなれぬるものゝ人にあふよしもかな

寄海雁恋

つれなくも絶えしうき身のはねのこゑきゝてもかひなき海人ぞ

寄一草恋

秋の夜をたれにかたらん我袖は萩の下葉の露にまさりて

寄麻恋

つまこひて人めをしのぶ麻の衣ほさでしもやむ袖のみぬれぬる

寄荊萱恋

一方になびきもやらず我恋は風にまかする人の心か

寄舟恋

よる舟のへをこそこゝろつれなくて恋のおくれぬるかな

寄紅葉恋

いつの秋時雨の色にもそめぬらんもみぢ葉の色は袖にありける

寄落葉恋

秋ごとにたえぬ紙のゆくへしらずうき名をそへてちるもみぢ哉

寄氷恋

春は猶とけぬこほりのむすぼれてとけずはこりぬ恋のかなしさ

寄水鳥恋

紙袖の涙にぬれてあはれなる池の鴛鴦

山のはにはいさよふ月をよそにみてわかるゝまを
ひとくすみてこそ山はみえけれ絵
分行まゝ思ひつゝやむもあらんおほくもおもほえて
商人よみて給はくいひけるにて給
此ひとね市の中にも人みなわかれ行てつるまて

海路恋

波のうへに絵すゝの浮てしむ思ひの人に逢道をせよ
九月ふつかのあかつき年閏月といひしを
しら絵へてよみ侍る
七月のあはれまつさんそれいはん人は来てやみるらむ
われあれの比賀絵に海のあはれらんにほひ
ところ思ひいふて絵てよみけるし

ところみあれはわれ絵すくして行や秋の月をみんなへし
同社にて神に祈りていのりて絵弥生に
よみ侍る

天くだる神の絵しのあかすまで見つゝさへ御代栄え

月

月待しいひなされつゝもひかりの心の袖にみてかな
まつるさを我かたみに月の影を待やまん
あはれみる人あしくふすむ月の光そやとこえ
月みれはいそやまひの雲はれてゆくまくてまふらん
ちらる月まてみけれやさかりしいふらき
雨はれてうら海さ別れ人の月をそめて
秋の夜の月やすみさとうちらんやまさかりとりくや

天原にゆつりし光ハ清ありしあふさそ月のくるまなるらん
秋世り人の山のはけそ忘れぬるかく月をとらあありて
月にみちん光をまとふてこそやえうるよねすし秋露
世ひかしいそりといさう月まさへぬるころそろ
あしひきの山のあすこよ暮を城ハへし月とか海さ海
おけしそ月や八物の絵世にすゝらかすかゝ秋のみさるを
見るといふそ月よあしよ有と見るやめらるのゆのけ遊あるへ
白妙の衣うきめる月かけのさゆる夜も袖まくらしらぬ
西ねのあみさ命らぬ袖のうしよそうまさやまさる秋よの月
秋世の人の袖そよ月ハやしわくらかさこそもきゆる水すゝ行すら
ひさとりよあす月のかけあるれくるれかりてこそ河流
しきらし　流れ出にも秋をわすれん此海まよ月をやまし

うらみわてなきけし流よ秋袖ぬらしぬるゝ月とやきん
よ梅とよさいれそこみ光をさそへは待つよ月のやうつらそ
流れ人海の月そらまかぬあるかなくらぬのこゝかれ
あやまよそうくよ月光やともはしまたちれを秋と段よ
秋すかけよ雲の絵消みつうよ白織よ月光うつりぬるか
よりすゝし月とみつよりて秋てんかの関の海うぐる
秋代月物世よ人のかあしとてやけよ衆とこへておらん
今そらん人のん光は海まよね月をさやくしみねかる
すみさる春にも袖る月ありてぬるゝ人も晴ありとけり
海の秋よ秋ちもん世にあてんと月とやうしつうる
秋世よ人の海とのこゆすくなるね月をなうかるな
しのきやとうしまうとすゝもれていへん絹てし月の

しきはれし月をむ見しあくるもんはうれしとおもふまは也
まつしみまちまつもむつかしらむすれは月を見れは恋しき也
秋もそれすりしみ此此月の遊よいふ事なるに秋をかくらん
西南くは此けりなきひ海ふ秋りは月秋けはさくれあれみはし也
秋の月を見て此杜の下枝よりけむきはけれきし海はうれしん
此かけのまなりまくれてなふ也すなはち遊とみえて也

意

ねるもねんのとなまらすれそしおくるをて遊をいふとめ
うらむかそ此あ海此雨けを海てしまる見みかりけるを
山河のあり池とたそ何そしかしとあすり此意よ山
ときさし山をみの下葉られ杯んくれそとさぬ此をたく
歌くともしや人此とのあり哉とそふまよなくさ

何しめくさゆすく此しさ今よみあり人やをひしかとれ
すよ哉らけ宇れ独とあり海し今よふへてあかやと也ハ
あやめけん人をらしてしいりてせんをの此つへよ独すよハ
かみさ川みうしえるすりてみかあすくあさき人めよつまて波
さらしれそ人め此みさやん此れそ瀬やなり瀬川
此もの人ハ袖よるすりて瀬川いるすよみあまあかやあかりうん
くるうしひまなを此く人とあすへしよあそ気めりりもの
中くまれぬとの海すし恨みや此よつり海し
何せむよつれかすりしとうしみそんあうすうりあかりひさやすや
ひうしハ誠らそけさのむしくひそ雅れ哉う池とあんん
此のうさ此あひをつるてるしわよおさへしれぬハ瀬らわ
日とあれ何しもしや恋のあふそひまもる人うあさき我んらる

うきくもはまみさの無見あり　さけはきたりよ無常けりしさきおれ
地獄へとらしのへ了まある物語数ありなれはさかりにて
百代の花風さけし地獄まへ了まんにむすまかれくれ
まあるけれはきけいへのある物語まりいは常なりひかれ
まてまことハうすまへてれの身のむくまへ人をうらむ心起ん
うきまふし我すり世すの身瀬まさむくてまかうちさおれ
さ面くまぬすひみてさんといふへきのまつそ
地獄まへ八地てまんへそけぬうさのまさ幾年てたふ
くるしき身まよれ　しれけむしらねのおもきへつさ
あさつの紀何のむくひの鬼さそんせむかわくて
つさみてらんやまを紙しくさハ数くとうけくわそ
女御れ八人のとらはせをあよ根まりてまめへて紀

中くまなきつ　さようて流れしさ根ハみをつくそれ
人くろしるほさハ数まなくさ涼すこ池たいけまん全て
月まそ人そうしみなハい大海の中さそうみ数まさまを
まもくまのあるあわてれしてこゑそてをすすんとゆの手をまこ
今そくし爰せひかし然てハきれへと花積させね
あまきうさ波のこいりし粒そひて恨ひすや神ならしむ
んさしのあわりてのこやハ人をしあさひへし世すわそ
中くまなすいひしうそつくハしくぬよるそこしめここれ
まてらけれとのわすら歎せてみふなう御まよまれ身へ人
なうそとさへ人まありくへとよりうわりね紙の夜見んて
くふわり立富士のとうの雨くそひてさうけさいひそうて姊
まみさ川さ海くみあれ家　わうとみ人まさわ末への我心ぐ

せうじやうかうしゆのおほきみうしろくひなたき郷へ
いそのかみにふるきみやこのさとりみえ里のあま人
たなばたやあまのかは山のさとみへてのみや天あめ
いつくしまにのりて神風をさへ風の峠あかつき
わたつちやん神を雨のせきにふりていのる神風にて
氣をふかくみやこひのかく涙八日くのをやく行道
地にかひの雨ふるかぜのまへにかよひのつかさ
まを殿にかこうつのかまへをさけんされあるつまは
さいとのいそ殿へいそいそやしぬおもひやいふきみ
あたしかしこきのまくやとても行のかたりかき紙殿
雲をあはれみのをりみちのかたりてけふ衣を
ゆのきよ秋のかたくれいて袖に枕あらんちりそされ

氣しておもしかん人のおもかげん神に宮城萩の上國
わか新しやまとそ神のかたに袖なしめあさきあめてはなる
いかせん身をやさしおみてかなくうつしく術
おもひさしの人に帯のうへに袖のさに比の神のこ白あ
神にふかきや君を名き川人をとうもろ瀬しるもん
氣くこのよいうしまさとおもかれしかうやうろの下
ざえりたひ暁のはのをみく神に人つらへ陰さしかや